

第3回 腹証奇覧・奇覧翼を読む

桂枝去芍薬湯その他

診方 § 四 診

峯 尚志

今回学ぶ処方

(○は文礼の●は叔虎の解説)

○●桂枝去芍薬湯

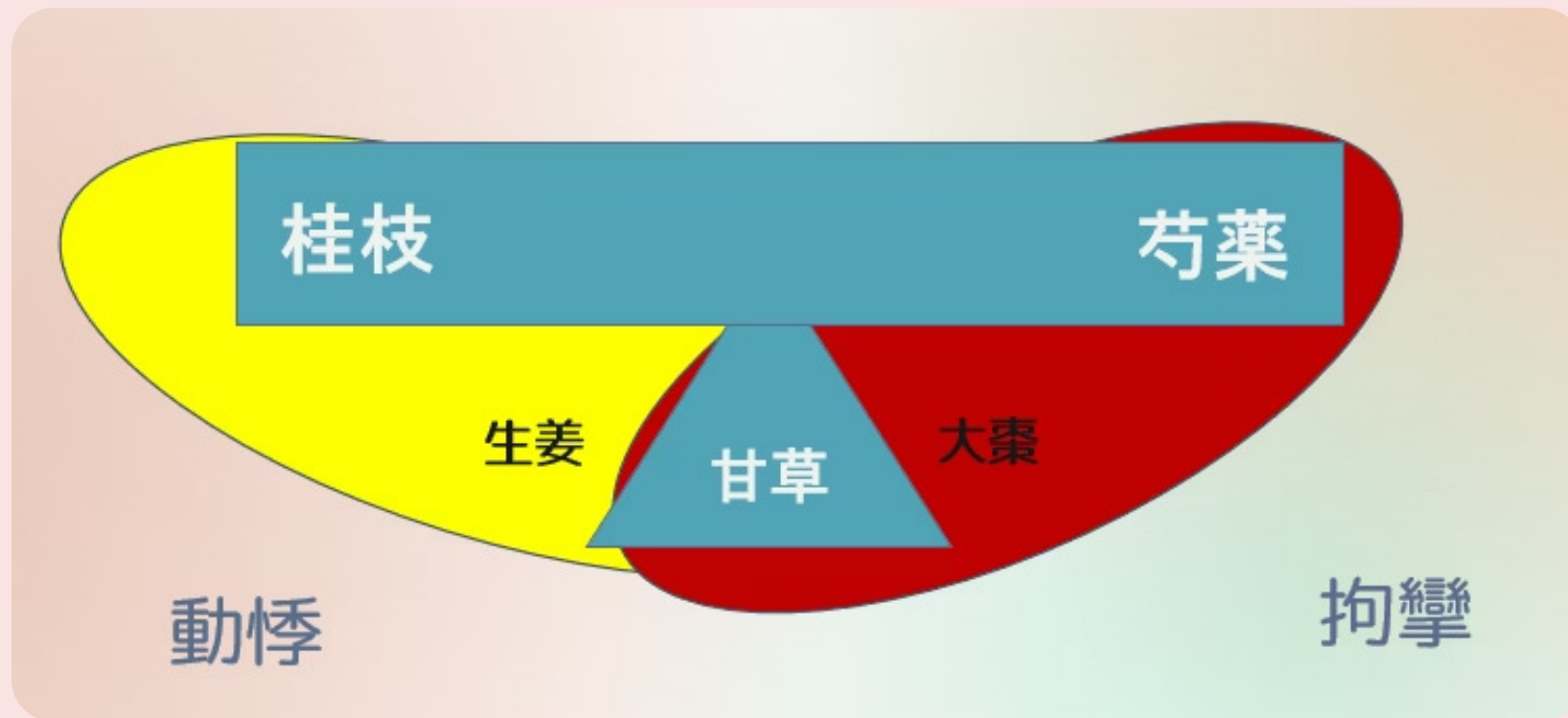
●桂枝去芍薬湯、桂枝枳実生姜湯、
桂枝去芍薬加皂莢湯、桂枝芍薬加蜀漆竜骨牡蛎湯

●桂枝甘草湯、桂枝甘草龍骨牡蛎湯

●桂枝加龍骨牡蛎湯

●小青龍湯、麻黄湯、大青龍湯

処方構成から腹証を考える 桂枝甘草は胸満動悸を芍薬甘草は腹痛拘攣を治す



桂枝去芍薬湯

去芍薬の処方の意味とは

動悸、胸満をきたす急性疾患の処方と心得るべきである
急性疾患の動悸は桂枝甘草湯

加島先生の桂枝甘草湯の使い方 桂枝—甘草の抗不整脈作用

- 松浦の桂枝末、甘草末を使用
- 発作性頻拍症には桂枝末0.5 g ,甘草末 1 g
- 心房性期外収縮、心室性期外収縮には桂枝末 1 g、甘草末0.5 g

●桂枝甘草湯 (急性の動悸、発作性頻拍)

臍上より心胸までの間、動悸強くタクタクとおどりて
安からざるもの

気衝逆して急迫するの劇症なり

「汗を発すること多に過ぎて
その人、手を叉し自ら心をおおえども
心下悸して按を得んと欲するものは
桂枝甘草湯之を主る。」

「水三升をもって以って煮て一升をとり、頓服す」



桂枝

クスノキ科のケイの若枝

主成分：芳香性のあるケイアルデヒド、ジテルペノイド、カテキン、タンニンなど

味：辛、甘 性：温

帰経：心、肺、膀胱

効能：解表、止痛、温通、利水、鎮静

発汗する、上衝した気を下げる、温補し、経脈の流通をよくする。

薬理：ケイアルデヒドは血中カテコールアミンを上昇、末梢血管拡張、
血圧低下、心拍数減少、中枢に対して少量で覚醒、大量で抑制

桂枝—甘草：動悸を止め、気の上昇を下げ、精神安定をはかる。

気逆は陽気の不足

要するに結胸および胸脇苦満を除くのほか、諸胸満するもの、気逆に依らざるもの少し、気逆の由りて発するところは陽気の衰うに在り。

陽を助け気を下すことを謀らずして、いたづらにその満を消せんと欲せば、その効をみざるのみならず、災いをまねく。





○桂枝去芍藥湯（文礼）

「太陽病之を下して後脈促胸滿するもの」

桂枝湯証なのに、下すことによって、陽氣が虚し、脈が速く打ち、時に止まり、胸滿する。

その氣上衝するとき、激しいものは心を衝く、すなわち衝心、衝胸、衝咽喉。

○桂枝去芍薬湯（文礼）

図のごとく腹中軟にして拘攣なく
胸満して上衝し、また腹中力なく覚う。

あるいは下痢をもって
下した後必ず上衝胸満して腹力なくおぼゆるものあり

この方を用うれば腹中和して快癒するなり
腹の力がみごとに抜けているところに注目！
腰が抜け、骨盤底筋が抜け、腎まで虚している

上はつまっているが下は抜けている

この故に、その胸満するもの、実邪のいたすところにあらざるを以って、ただ心下より下に腹力なく、筋張るものなくして、胸前より上へいっぱいになりて、上下のつり合い悪しく覚えるなり。



●桂枝去芍薬湯（叔虎）

胸満して
心下より下、自力なく覚え之按ずに
いもまた痞硬拘急せざるもの
桂枝去芍薬湯の腹証なり



●桂枝加芍薬湯と○桂枝去芍薬湯



枝加芍薬湯証では腹直筋が緊張して体幹を支えているのに対して
桂枝去芍薬湯では腹直筋の緊張なくさらに腹力は虚している。
腰椎下部の後弯も強くなり骨盤底筋の緊張も抜けて、臍上の動悸が上にまで突き上げてくる

去芍薬の桂枝湯類方について

桂枝甘草龍骨牡蛎湯

（動悸と恐れを治す）

「桂枝甘草湯の証にして、その衝逆急迫の状、激しからずして、却って胸腹間の動悸強くおどりと煩燥するものは桂枝甘草竜骨牡蛎湯之を主る」

桂、甘をもって表を和し急を緩めしむ。

竜骨牡蛎にて驚恐の動悸を鎮めて煩燥自ら治するの意なり

煩燥は精神の急迫も伴う。



桂枝去芍薬皂莢湯

桂枝去芍薬湯に皂莢2枚を加う。

胸満して濁を唾し、涎沫を吐し、もしくは咳逆上気等の証あるもの

皂莢 トウサイカチの未熟果実

強い去痰作用

桂枝枳実生姜湯

心中痞し、諸逆、心懸痛するは、桂枝枳実生姜湯之を主る。

一男子、膈内痛みて忍ぶべからず、休作時あり、癒えざること数日、、、
これを診するに、胸中痞満衝逆の状あり、桂枝枳実生姜湯を与えて一服するに痛失するがごとし。

枳実：

性：苦、微寒 帰経：脾、胃、大腸

破気消積、化痰消痞



桂枝去芍薬加蜀漆竜骨牡蛎救逆湯

蜀漆 痰を去り水を逐う

ユキノシタ科のジョウザンアジサイの根を乾燥したもの

薬徴続編では蜀漆とは胸腹及び臍下の動激しきものを治す、
ゆえにかねて驚狂、火逆、瘧疾を治す

薬徴：竜骨は臍下の動を治すなり、牡蛎は胸腹の動を治すなり。

芍薬を加味された動悸の処方（桂枝湯の応用処方）

桂枝加龍骨牡蛎湯証

それ失精家、小腹弦急、陰頭冷え、目眩、髪落ち、脈極めて虚芤なるを、清穀亡血、失精となす

脈、これを芤動にして微緊なるを得れば、男子は精を失し、女子は夢に交わる

桂枝加龍骨牡蛎湯の証なり

四 診 § 切 診

●桂枝加龍骨牡蛎湯

(慢性の動悸)

図のごとく、臍上中脘の動悸つよく
少腹に弓弦をはりたるごとく引き張るものあり
常に衝逆（のぼせ）、目眩（めまい）の患あり
て
上実下虚、上熱下寒、脈虚芤なるもの
桂枝加龍骨牡蛎湯の証なり





桂枝加龍骨牡蛎湯の基本は脾腎の冷え

桂枝加竜骨牡蛎湯は金匱要略の血痺虚劳病篇にあり、
虚劳から血痺という血の滞りが生じて冷えのある処方。

腎が虚しているために、陽気を留めることができず、
気が昇ってしまって桂枝のみでは引火帰原ができず、
竜骨牡蛎の力を借りて降気潜陽する。

麻黄を加味された利水処方（桂枝湯の類方）

●小青竜湯

傷寒、表不解、心下有水気、乾嘔、発熱而欬、或渴、或利、或噎、或小便不利、少腹満、或喘者、小青竜湯主之。

桂枝、麻黄、細辛、芍薬、甘草、乾姜、半夏、五味子

●小青竜湯腹証

腹証：心下中脘より上不容に辺まで
タブタブとするほど水気ありて
咳出で、或いは咳逆喘急し発熱、悪
寒、乾嘔するもの
小青竜湯の証なり



「心下に水気あり」とは

脾は生痰のもとといわれるように、胃腸機能の衰えは、湿邪の停滞から痰飲をうみ、頭痛、めまい、耳鳴り、鼻水、関節痛、体のだるさ、重さなど様々な症状を発する。

典型例では舌はやや胖大で水分を含み、苔は薄く白く透明な滑苔が少量みられる。

鼻粘膜は浮腫状だが、赤みはそれほど強くない。

腹証においては腹力は弱から中等度で、胃内停水はみられる場合もみられない場合もある。

肌膚もある程度の水滞による厚みがある。

くしゃみ鼻水と胃内停水

(心下に水気ありは、必ずしも胃内停水とイコールではない)

(1)

1

胃内停水の研究(第2報)

寺澤捷年*, 土佐寛順*, 坂東みゆ紀*
今田屋 章**, 檜山幸孝*

A Study of the Mechanism of "INAI-TEISUI"
(Water-imbalance syndrome in Kampoh medicine)
.....The second report.....

Katsutoshi TERASAWA, Hiroyori TOSA, Miyuki BANDO,
Akira IMADAYA and Yukitaka HIYAMA

胃内停水の研究、日本東洋医学会雑誌第36巻第1号(1985)

水飲を温化化痰する甘草乾姜

甘草乾姜湯の条文

肺萎 涎沫を吐し咳せざる者、その人渴せず、必ず遺尿し、小便数、しかる所以の者は、以って上虚して下を制すること能わざる故なり。これ肺中冷となす、必ず眩し、涎唾多し、甘草乾姜湯を以って之を温む。

肺脾腎の陽虚で冷たい水が行き場を失って停滞し、口渇はなく、泡のような薄い唾液が出て、薄い透明のおしっこが出て、めまいする。

欬嗽する場合も薄い痰が出る。



乾姜の薬能



温中散寒



回陽救逆



温肺化飲、化痰

乾姜が入ると胃氣が鼓舞されパンチがありシャキッとなる

細辛、五味子の絶妙な配合

宣発、宣肺

細辛

麻黄

収斂、肅降

五味子

芍薬

小青竜湯の服用によって大量の汗をかくことはない。

桂枝、麻黄、細辛の解表を、五味子、芍薬の収斂、肅降の作用が制御している

小青竜湯の目的は、湿性の痰や喘鳴をはらうこと

喘鳴や鼻水を治してゆくためには

甘草と乾姜の薬対を用いて腎陽を鼓舞し、

脾胃の機能を高め水滯を除く必要がある

麻黄

性味：辛、微苦、温

帰経：肺、膀胱 肺気を宣発して肅降利水する

薬能

発汗解表

宣肺平喘、止咳

利水消腫

散風透疹

麻黄剤の注意

- 1 — 発汗が過度になると津液を消耗すると同時に、陽気も耗散する
- 2 — 表虚自汗、陰虚発熱、虚弱者、出血には慎重に用いる
- 3 — 容量は冬は多めに、夏は少なめに
- 4 — 長く煎じすぎない

芍薬を含めぬ解表剤

麻黄湯

麻黄、桂枝、杏仁、甘草

太陽病、頭痛、発熱、身疼腰痛、骨節疼痛、惡風、
汗すること無く而して喘するものは、麻黄湯之を主る。

惡寒、発熱、頭痛、節々の痛みが強く、腠理が閉じて無汗で喘鳴するもの。

大青龍湯

太陽の中風、脈浮緊、発熱惡寒、身疼痛、汗にして出でず而して煩躁するもの、大青龍湯之を主る。

若し、脈微弱、汗出で、惡風するものは、服すべからず

これを服すれば、すなわち厥逆し、筋惕肉瞤す、これを逆とするなり。

(これ治を逆にして致すところにして、茯苓四逆湯の証なり)

ウチダの大青龍湯（煎剤）

麻黄6、杏仁5、桂皮3、甘草2、大棗3、生姜1、石膏10

発熱して身体疼痛し，汗なく口渴し，煩躁するもの，あるいは頭痛，四肢浮腫，尿利減少，喘鳴，眼充血などを伴うもの：感冒，急性関節炎

麻黄湯合越婢加朮湯（麻黄11g）

強発汗散（剤盛堂）

大青龍湯の麻黄は少なくとも10 g から20 g

葛根湯	葛根4両、麻黄3両(3g)、桂枝2両、生姜3両、甘草2両、芍薬2両、大棗12枚
麻黄湯	麻黄3両(5g)、桂枝2両、甘草1両、杏仁70個
小青竜湯	麻黄3両(3g)、芍薬3両、細辛3両、乾姜3両、甘草3両、桂枝3両、五味子半升、半夏半升
越婢加朮湯	麻黄 6 両(6g)、石膏半斤、生姜 3 両、大棗 1 5 枚、甘草 2 両
大青龍湯	麻黄6両、桂枝2両、甘草2両、杏仁40枚、生姜3両、大棗12枚、石膏

まとめ

今回は桂枝湯から芍薬を抜いた桂枝去芍薬湯からはじまり、桂枝と甘草の組み合わせが急性の動悸を治すことを学び、さらに桂枝加龍骨牡蛎湯になると、動悸と同時に腎気の衰えによる精神不安にも作用することを学んだ。

次に、強い発汗作用、交感神経作動薬である麻黄を含む処方について学んだ。

花粉症に多用される小青竜湯の中には桂枝湯が含まれていることを理解し、麻黄が発汗作用だけでなく利水作用をもっていることも確認したい。インフルエンザに対しても用いられる麻黄とは強い発汗作用を持つ麻黄剤の代表である。さらに発熱や煩燥の強いものには10g以上の麻黄と石膏を組み合わせた大青竜湯が用いられる。しかし麻黄の量が多すぎると脱汗して血圧低下となる危険があり、石膏を組み合わせることによって体表の過度の熱を冷ますと同時に水を膀胱にも導き、脱汗を防いでいる。



最後に

腹の虚軟と腰椎後弯（腰抜け）と 骨盤底筋の抜けをみて
腎の虚していることを見抜くべし

風船の糸を支えるものは 腎である